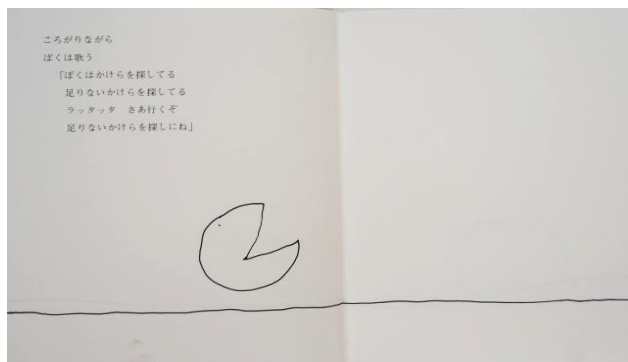


—私が私らしく生きる為に、あなたがあなたらしく生きる為に、本当の自分を理解してもらう為に—
—結果として、今いる場所が居心地良く幸せな場所になる為に—
—子育てに、人間関係に悩んでいるすべての人の為に—

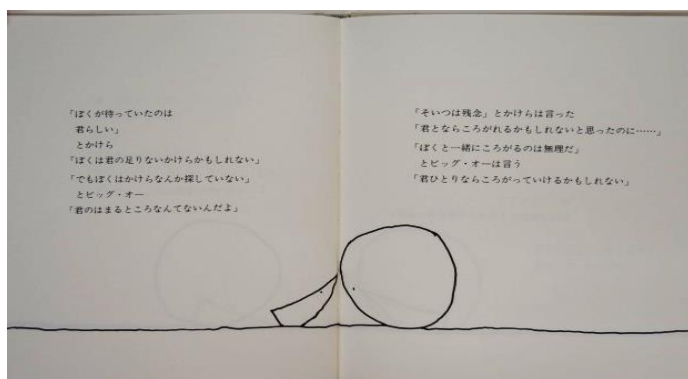
その中でも一番大事なことを今回も抜粋してお話させていただきます。参加された方は復習のつもりで、そうでない方は特に大切なことを確認する時間にしていただけると嬉しいです。

今回は絵本「ピックオーとの出会い」の絵本から始めました。前回、紹介した絵本、「僕を探しに」の続編、そして、この4回シリーズの答えがすべてここに詰まっているからです。絵本で見る、聞く、感じることで「目標の明確化」をしてほしいと感じたので、この絵本をはじめに紹介することにしました。興味のある方は是非読んでくださいな。



人間は、苦しいこと、悲しいこと、辛いこと、情けないことがあるたびに心に穴を空けていきます。そしてその穴を埋めようと何かに頼っていくのですが、道を間違えるとそれが、悪い仲間であったり、覚せい剤だったり、買い物中毒による万引きだったり、と悪い方向に進んでいきます。時として、頼った人にマインドコントロールされてしまうことにもなりかねません。

ではどうしたら、この心の穴を、自分が納得する方法でうめていくことが出来るのでしょうか、その答えはこの絵本には書いてはないのです。きっと、その答えを見つける旅が、人生なのでしょう。



そして今回紹介した「ピックオーとの出会い」はその続編です。今度は角のある小さなかけらが自分にぴったり合う大きい形の相手を探す旅です。

そしていろいろな形に出会うのですが、またもや、どれも当てはまりません。その旅の途中で大きな丸「ピックオー」に出会うのですが、僕には君は必要がないといわれ、かけらにアドバイスをして「ピックオー」は去っていきます。そのアドバイスは「自分一人で転がることにチャレンジする」ことでした。

長い間考えた挙句、角のあるかけらは「パタンパタン」と倒れながら少しづつ、進むうちに小さな丸になって転がり始めるのです。そうすると、いつの間にか、「ピックオー」が寄り添い、二つの小さな丸と大きな丸は、それぞれが自立しながら、同じ方向を向いて、歩み始めるのです。

これこそが4回シリーズの答えであり、すべては、「ゆりの樹幼稚園の教育理念—三つの教育・三つの柱・自立の循環・三つのかわり・1 O E・ゆりの樹が目指す人間像の根幹」をなすものと同じ考えです。

「ゆりの樹幼稚園の教育理念—三つの教育・三つの柱・自立の循環・三つのかわり・1 O E・ゆりの樹が目指す人間像の根幹」については、もう何度も、お話しておりますし、巻頭言や入園案内でも掲載しておりますので、割愛させていただきますが、究極のところ、人間が目指すところは、それぞれが自立し、一人一人があるがままの自己と、周りにいる他者を受容する、「**自他受容し、勇気、愛とおもいやりの心をいかに育てるか**」にかかっていると思います。



自分の事が大好きで最後まで自分が信じられる教育

ゆりの樹幼稚園が考える教育の循環

「真に自立した子ども」に育ちます
自分を信じ、自分らしく生きていくことができます



友達との関わりの中で育つ子ども達

●私と私●

- ～自分が大好きという自己肯定感を
持つことが教育の土台～
- ～自分を信じる事が出来れば
人を信じる事が出来ます～

●私とあなた●

- ～どこまで自分を責めて、相手も大切にしたら
いいのだろう、この「**ほどよさのかけん**」を友達
の関わりを通して学んでいきます～

●皆の中の自分●

- ～クラスの一員であることがうれしい～
- ～皆と一緒にいけると楽しいという思いに
子どもが向っていくようにすることが
教育のエッセンスです～

今年「アナと雪の女王」が大ヒットしましたが、あのお話も、「**自他受容し、あるがままの自分を受け入れる**」がテーマだと思います。両親がいなくなり、人の目を気にし、自分の能力を隠して、引きこもり、孤独の中で苦しみ続けるエルサ・・・エルサの心だけではなく、私達人間の心に、閉じ込められた、「苦しい、悔しい、悲しい、情けない思い」は、凍っているけれど、火のように心の中で燃え続けているのです。

これを「**フロースファイアー**」といいます。そして、この心の奥底の「**フロースファイアー**」を、又、最後に体ごと凍ってしまったアナを溶かすのは、心無い王子や恋した人のキスではなく、「エルサのアナに対する愛と思いやり」今、問われる希薄化してきた「**家族愛**」でした。そこにも深い意味を感じます。

そして、その姉妹の「愛と思いやり」が、エルサに「**自信と勇気**」を与え、国すら救ったのです。この映画がヒットしたのは、現代の世相を浮き彫りにし、人間の生きる道の究極の答えを示していたからでしょう。

この、「**愛と思いやりのある心が育つ人間になる**」、その為に必要な考え方、子どもが育つ教育理念が、やはり、「ゆりの樹幼稚園の教育—三つの教育・三つの柱・自立の循環・三つのかわり・1 O E・ゆりの樹が目指す人間像の根幹」なのですね。今一度、上の図と入園案内などで、振り返って頂ければと思います。

そして、保護者の皆さんは我が子が良い子に育ってほしいと願っていることでしょう。
その、思いのあまりおかしてしまう過ちが、「五つの過ぎたるかかわり」なのです。

●5つの過ぎたるかかわりについて●

生まれてきた時から、過干渉や、過期待の育てられ方をした、子どもはどうなるのかの話です。

5つの過ぎたるかかわりとは、一言で言うならば

保護とは、子どもが望んでいることを、望んでいるときに、望んでいるだけ与えること

過保護とは、子どもは望んでいるけれど、子どもが自分でやろうとすれば、十分できることまで、
安易にこちらが手を貸してやってしまうこと

過干渉とは、子どもが望んでいないことやりすぎたり、やらせすぎたりすること

過期待とは、子どもが自分に期待するのではなく、子どもが出来る以上に親が望むこと

過放任とは、子どもが望んでいる以上に放任すること

過許可とは、子どもが望んでいないのに許可を与えること

要するに、**子どもが、そのことを望んでいるか、望んでいないか、がチェックポイント**です。

だから、**親の肌感覚、感覚の鋭敏性がここでも大切になってくる**と思うのです。

「過ぎたる親のかかわり」を「成功する子育ての条件」では、このように述べています。

① **過保護とは**、その根底に親の気分や、都合を優先させすぎる傾向があり、愛の押し付け、いわば、愛の一方通行となっているのです。具体的には「手のかけすぎ」となって現れます。その結果、最後まで自分でやり遂げたという「成就の喜び挫折の経験」の両方が少なくなります。うまくいかなければ、すぐ人に頼むような依頼心（依存心）の強いわがままの子になってしまいます。

② **過干渉とは**、子どもに対する信頼感の不足が根底にあります。未発達であっても、一人の人間として信頼することが、人間関係の基本であることに気づいていません。更に、過干渉傾向の親は、神経質で、つい結果が気になってしまいます。具体的には、口の出しすぎとなって現れます。多くの場肝心なところで口を出すために、自分で選んだり、決めたりする体験が少なくなります。

その結果、選択と決断の出来ない、人のせいばかりにする集中力のない子になってしまいます。

③ **過期待とは**、先のことばかり、気になり、実態にそぐわない考え方が先行しすぎる傾向が根底にあります。さらに、この子のおかげで、親という役割を持てることに感謝する気持ちが低下しています。具体的には「期待の掛け過ぎ、ほめなさすぎ、できて当たり前」となって現れます。その結果、子どもは次第に自信のない無気力な方向に進むことになります。

④ **過放任とは**、根底に愛の不足と親としての義務の放棄があります。「そんなこといちいち聞くんじゃない、勝手にしろ」というような対応です。具体的には任せすぎ、手抜きやしすぎとなって現れます。愛と注目の欠如は乱暴で冷淡、自分勝手な子になってしまいます。

⑤ **過許可とは**、根底に親としての認識不足による信頼の与えすぎと、親の義務の放棄があります。具体的には「許可の与えすぎとお金の与えすぎ」となって現れます。共働きの親が祖父母に子どもを見てもらっているケースに良くあります。その結果自制心や忍耐力のないわがままな子になってしまいます。この5つに共通する特徴の第一は、愛と注目、承認の不足や欠如、二番目には**選択や決断の大部分に親がかかわり、「授受の喜びや挫折の体験」が少な**いことにあります。

三番目には、否定、支持、命令、禁止、比較、差別、無関心などの態度が言葉となって現れ、受け手の子どもには、不快な感情が習慣化しやすいのです。

子どもが習い事をする時に、いつも送り迎えをしてあげることが大切だと思っている親がいるとします。今、危険な世の中になってしまいましたので、このことは必要なかもしれませんが、安全が確保できた上で、それを子どもが望んでいなければ、過干渉になるということを考えなければなりません。

だから、**親や教師が先に先に行動することが問題**なのです。

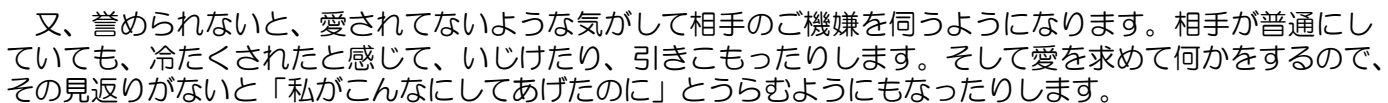
過干渉になるか、ちょうど良い保護になるかは子どもがどう望むか
子どもが次にどうするかにかかっているのです。子どもがそれを
望んでいればちょうど良い保護ですが、それを望んでいなければ、
子どもに嫌がられるか、いやいや子どもが従っているのです。
だから、**大人が子どもの行動をしっかり見ていることがポイント**
なのです。

反対に、過干渉のあまり、小さい時から、親が望んでいることをすることが喜びになっている子どもがいます。親から、何かされることがあたりまえになってしまっているのです。お母さんが、先に何でもしてしまい、結論を出すのに慣れているので、母さんがすることがすべて正しいのです。そうすると、お母さんが喜んでくれるお父さんが誉めてくれることだけに関心がいくようになります。

こうするとお母さんが喜んでくれる、お父さんが誉めてくれるという反応だけ見て行動をとっていると、その結果、相手の反応を見てからでないと行動が取れない大人になります。

本当に自分が何をしたいのか、何を望んでいるのか、自分で分からなくなります。相手の反応だけを見てしか行動が取れないと、相手の承認を求めて、どういふ答えが正解か、相手が望む正解だけを求めて、誉められる答えだけを求めて、苦しむことになります。

ゆいの樹がめざす人間像「自分軸で生きる」の反対、「他人軸」相手の顔色をうかがって生きていくことになるのです。



だから、過干渉が一番怖いのです。特に過干渉のつけは青年期などのあとになってやってきます。おもちゃをほしいと泣きじゃくっているときも本当にほしいのはおもちゃかどうかということにもつながりますね。

本当はお母さんに甘えたいだけなのかもしれません。気持ちを分かってという表れかもしれません。十分甘えが足りて、満足すると子どもは自立するのだといわれています。

そういう意味で、佐々木正美先生は著書「過保護のすすめ」で、こどもが本当に望んでいることを、望んでいるときに、望んでいるだけ与えることはとても難しい、だから、少し過保護くらいでちょうどいいとおっしゃっています。

これが、本当に子どもが望むことを全部やっていいの？という答えになります。

子どもが何を本当に望んでいるのか、それを本当に望んでいるのか、望んでいないのか、子どもの心持ち、行動しだいで、保護が過干渉になるのです。

親がどうしたかの結果はそのとき子どもがどう望んでいたか**で変わる**のです。だから、大切なことはそのことを感じる力が大人にないと上手い出来ないのですね。

だから子どもの行動を見ずに、大人が先に先に行動を規制したり、体験を排除するのが子どもの将来にとっては困るのです。辛い苦しい悲しい体験も、嬉しい体験と共に必要なのです。

辛い、苦しい、悲しい体験をしたからこそ、相手にも優しくなれます。自分の気持ちを分かってもらうためには相手の気持ちもわからないと自分が楽しめないのです。だから、子どもの中のルールができるのです。ルールを守ろうとするのです。

小さな辛い、苦しい、悲しい体験を乗り越えたからこそ、大きな体験を乗り越えるすべも見えてくるしそれを乗り越えようとする勇気もわいてくるのです。

そしてその乗り越える勇気の源は乳幼児期に十分愛されたという原風景でもあるのです。いつまでも過保護にしてほしいというのでは困りますが、親に十分愛されたと感じたなら自分から自立していくのです。愛され足りないから「もっと、もっと愛して」と甘えが続くのです。こちらが、子どもに何を望んでいるかも考えてみるのが大切であると佐々木先生は言っておられます。これは過期待につながると私は考えます。

では、次に私達大人が、子どもに期待していることとはいったい何なのでしょう？

子どもにあまり期待などしていませんという方でも、考えてみるとたくさんあることに気づかれるでしょう。では、その期待は誰の期待でしょうか。子どもが望んでいることでしょうか。子どもの自分への期待でしょうか？違いますね。

それは親の期待ではないですか？ 親の理想ではないですか？

ところが、子どもは、その理想どおりになることを親が望むと愛されていないと感じるのです。親が子どものことを思って、期待をすればするほど、愛されていないと感じるのです。なぜなら、理想を押し付けるのは、「今のあなたではなく、親の理想どおりになったら愛してあげますよ」といっていることだからです。

こうなったら愛してあげる、こうならないと愛してあげないという、裏のメッセージが伝わるのです。条件付のメッセージになっているのです。

そして、その親の期待に答えるために、子どもは本当に自分がやりたいことを制限してしまうか、反対に親に隠れてやりたいことをやるという二面性をもつ事になります。

そして、親は自分が見ている子どもの姿が子どもの本当の姿だと思い込んで安心しているだけなのです。それでは本当の子どもの心を理解し、援助は出来ません。だから、この無条件の愛というのは、難しいのですね。

さて、この「5つの過ぎたる関わり」を打破する方法が「セルフコントロールできる子どもに育てること」にあると私は考えます。

子どもが自分で決めるということはとても大切なことで、いつ自分で決めるのかも含めて子どもに任せて待っていてあげるところに子どもの自主性が育ちます。

だから「ゆりの樹幼稚園の教育理念」が大事になってくるのです。自己決定力を身につける、即ち、自分で自分を律する（セルフコントロールできる）ことが出来れば、人は切れません。自分で決めるためには、大切なことを自分の今の感情に気づいて、自分で決めるという体験をすることが必要です。いつするかも含めて、自分で決めていいとなると、自分の衝動や欲求を抑制したり、先延ばしにしたり自分で出来るようになって行きます。

この「セルフコントロールできる子どもに育てること」の課題は、友達とのかかわりの中で育つことがもっとも大切です。**エリクソンは子どもが人格形成をする過程でもっとも大切なことは、「友達から学ぶこと」である**といっています。

佐々木先生はこれを「親や教師やその他の大人たちから教えられたことを、そのままの形ではなく、仲間と共有しあい、咀嚼しあって始めて人間的な能力にすることが出来る」また、「子どもの自立とは自分ひとりで何でも出来ることではなく、友達に寄りかかったり、友達を支えることで、程よいバランスを保てることにある」とおっしゃっています。

親や、教師から教えられた知識も技術も、スポーツも、ピアノも、習い事もすべて、友達との共感的な交流によって初めて人間的な資質や能力となるというわけです。すなわち、どんな能力も、単に教えられたとおりに身に付けるだけでは、人間性や人格には変化を及ぼさないのです。

ピアノが上手でも、何かが特に秀でていても人間関係が築けていない人もいます。そんな子は、仲間と共感してグループで楽しむことが出来ていないのです。上手にさせたいばかりにその余裕を親が与えていないこともあります。知識や技術を身に付けても、人を信頼する感情が育っていなかったら、子どもは本当の自立の第一歩は踏み出せません。何かが上手になっても何の意味もないのです。

「答えはすべて
自分の中にある」

過去と他人は変えられない

自分と今は変えられる

自己実現は一生。今日も明日も、
いくつになっても成長すること。
一生、人間は生涯教育。

変えることの出来ない過去をど
うするかではなく、親も子も

今をどう生きるか



信頼するとは「信じて頼ること」。友達を信じることが出来るから頼ることが出来るのです。信じているからけんかも出来るのです。教えることが出来て、教えてもらうことが出来る関係です。人に依存し、依存されるのが、自立の一步です。人を信じる力がしっかりしていれば、人を頼ることが出来るし、人に頼られることができます。そして自立の第一歩を踏み出すのです。友達が信じられるかどうかは親が信じられるかどうかにあります。だから親のかかわりが根底で大切なですね。これは親代わりの人でもいいと思うのです。心理学者、エリクソンの言う「集団の中で友達から学び、どう感じ、どう生きていくか」とはこのことです。

まさにゆりの樹幼稚園の自立の考え方、教育の循環の根幹もこのエリクソンの「発達レベル」に相應しているということになります。

さて、子どもへの親の関わりを見てきました。

子どもの発達に大きな関心を抱いた心理学者エリクソンは人間の子どもの学習し克服しなければならない発達課題は、母親を通して周囲の人々や世界に対する絶対的な信頼感であると指摘しています。

『この時期に母親を絶対的に信頼することを体験し得なかった子どもは、その後ずっと、自分の生きる世界やそこにいる人々に対して、基本的な信頼の感情をはぐくみ得ないまま成長していくのではない。親にこのような育て方をされた子どもは、劣等感を持ち、目的もしっかりもてない。ただ八方美人で周囲に迎合してしまう、ただ周囲の人に気に入られたいと思ってしまう。

周囲の人から不愉快な顔をされるとおびえて、どんな嫌なことでも体に鞭を打ってしまう。彼らは周囲の人から責められて生きてきた。だから、責められていなくても、責められていると感じてしまうようになる。

このような人の努力は自分の本性を否定する努力だから、努力すればするほど、消耗し、生きるエネルギーを失う。こういう人には愛がない。何をするにも見返りを求めている。

そして、マイナスの発想をする。人がマイナスの発想をするのは私はこんなに辛い。それでも頑張っている。そんなあなたはえらい。すごいと認めてもらいたいからである。その奥にだから私を愛してという魂の叫びがある。愛情飢餓感がマイナスの発想の原点なのである。

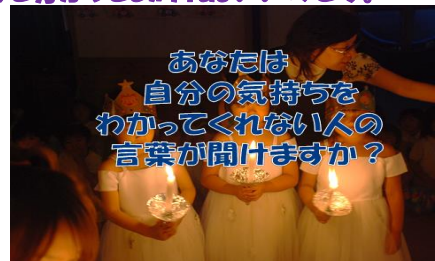
生きることが辛くなった人は周囲への憎しみ、恨み、敵意、恐怖、不安といったあらゆるマイナスの感情を惨めさで訴える。日ごろの憎しみの感情をストレートに吐き出せないのが、傷ついたという惨めさを誇張することで根雪のようにたまった憎しみの感情を吐き出そうとしているのである。

そのことでマイナスの感情を訴えているのである。でもそれが小さい頃から、愛されることがなかった無念の気持ちの現れと理解して

くれる人はいない。周囲の人から見れば、傲慢な人に写るけれど、生い立ちという視点からすれば、本当に同情すべき人なのである。だから、過干渉、過期待が怖いのである。』

又、昔の子どもは、叱られる事が予期出来ていたのに、育児不安の親からは、いつ、叱られたり、罵倒されたりするのか分からないので、子どもも不安で怯えていて、子ども自身が不安で、すぐ切れる子どもになるといわれています。決して問題解決を求めているのではない、ただ認めて、愛してといっているだけなのである。だから、**その気持ちを分かってあげれば、「そうがんばったね」受け止めて分かってあげればいいのです。**

親子の対話、それも、体を使った対話をする事が、
今、とても大事だと私は考えています。
だから**「感情にきづく教育、心と体が健康で、謙虚で、正直で、感謝が出来るゆいの樹の目指す人間像の教育」**がここでも大切になってくるのです。



命を大切に作る心も、ものを大切にすることも、言葉だけでは実感する事ができない事を、心で感じ、体で覚えていく事が大切だと思います。頭で理解できていても、心で感じ、体で覚えていかなくては、本当に理解している事にはならないからです。頭の中の考えと体の感覚が一体化していないという事は真の理解には至っていない事と同じだと思います。

今、大切な事は、子どもと向き合って、一生懸命家庭教育をしてほしいということです。

又、昔親の育て方が嫌で子どもである自分はそれが嫌いだった場合の話です。そして、自分が母親になったとき、この子だけは自分と違った育て方をしなければと思いながらも、母親は自分の過去を取り戻そうとして同じ事を繰り返してしまうそうです。

そういうことは繰り返されることも確かでしょう。でも、みんながそうでしょうか。私はそうは思いません。確かに幼児虐待も含めてこういうこともあるでしょう。でも、少なくとも、皆さんは、そういうことがあるということを、私と一緒に学びました。だからそういうことがあるのだということを知っていただければいいと思うのです。気づいていけば防ぐことが出来ます。人が気づいているか否かということには天地の差があります。

過去を顧みることはとても重要なことです。しかし過ぎ去った過去は取り戻せません。むしろ、新たなスタートラインに立つことが大切です。しかも、誰しも完璧な親に育てられたわけではありません。その上、自分の親も、祖父母に影響を受けた上での、子育てであったのかもしれないということは容易に想像がつくことです。そのことに気づけたとき、親の養育態度に対しても、許すことが出来るのです。

自己実現は一生です。今日も明日も、いくつになっても成長することは出来ます。一生、人間は生涯教育です。『**変えることの出来ない過去をどうするかではなく、今をどう生きるか**』であろうと思います。

「今ここに生きることを」を精一杯実現すればそれがやがて、いえその瞬間に過去に未来になります。

だから、私達に子育てという仕事が任されているのだと思います。親が完璧になっているのを待っていたら、一生子育てでなんか出来ません。人は親になることで、もう一度、自分が通り過ぎなかった発達レベルを繰り返して体験することが出来るのです。人は親になることで人間にもう一度なるのです。いえ、本当の人間になるのです、といった方がいいでしょうか？**「子育ては自分育てである」**ことの由縁は、ここにあります。

子育ては自分が成長するまたとないチャンスです。子どもを生み、子どもを愛し、自己肯定観を持つようにサポートするプロセスはまさに、再度、親自身が自分を愛し、自分に自己肯定感を持つためのプロセスです。

愛されずに育った人も、自分が子どもを愛し、子どもに愛されることによって自分を愛することが出来るのです。子ども達は、私達、親、教師を育てるために、私達のところにきてくれているのですよ。だから、自分に自信がもてない、自分を認められない、いつも不安なあなた、そして自分が好きになれないあなた。だから、心配しないで。自分の人生の生きなおしをしましょう、もう一度。子育てを通して。

だからこそ、人生に遅いことは何もないのです。子育てにも手遅れということはないのです。

気づいた、今から歩き出しましょう。気づけないより、何より気づいたことが、一番の宝なのですから。勇気を持って。一緒に育ちましょう。子ども達と共に。子どもの感情を受け止められる親になる為に・・・

さて、次は「**よい子の落とし穴**」のお話です。

子どもの心をそのままに「そお、辛かったんだね」と受け止められないのは、それを受け止めると、大人が自分自身の不安が喚起されるからにはかなりません。子育てで直面する問題は、子ども自身の問題ではなく親自身の問題に直面するからなのです。だから「子育ては自分育て」なのです。その意味において子どもは、大人でも**人間関係における相手は「自分を写す鏡」**といって過言ではないでしょう。

私達、親は「子どもに良い子に育ててほしい」と願っています。しかしそれは誰にとって良い子なのでしょう。

私達の子どもに対する良い子とは3つの側面があります。

子育てをしている間、私たちは非意識下なのですが

- ① **に「他者からみてよい子」に育ててほしい**
- ② **に「親である自分にとってよい子」に育ててほしい**
- ③ **に「真に子ども自身にとってよい子」であってほしい**

といういずれかの思いが根底にあるのです。

「怒りをコントロールできない子の理解と援助」より

①は他者の目を気にしすぎるあまりに子どもをしかりすぎる
「過干渉」「過期待」になります。②は子どもがいつもニコニコしていないと落ち着かない、親自身が幸せを感じることが出来ない為に子どもを叱れない、その為に、子どもの規範、規律、いわゆるしつけが構築されない「過放任」「過許可」になります。
これが親の過ぎたる関わりです。

保護者の方は皆さん我が子に良い子になってほしくない方はいないでしょう。

例えばここに「扉」があります。みなさんはどのような言葉かけをするでしょうか。

過保護 いつでも先に開けてあげる。

過干渉 危ないからやめなさいと厳しくいうか、危ないことは前もって取り除きさせない。

過期待 できないとだめでしょうと否定するか、きっとできるはずと賞賛しすぎる。

過放任 しらんぷり 何をしているかにも気づかない。

過許可 何度しても、まわりに迷惑をかけても、きちんと注意せずさせる。

子どもの言いなりでやりたいようにさせる。

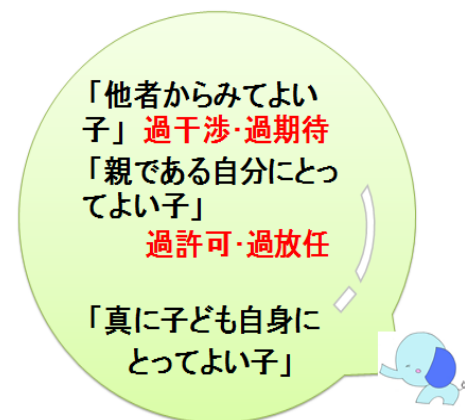
さて、保護者の皆様はどのタイプでしたか？

大切なことは「しっかり、見守って、やってごらん」と背中を押して、小さな成功体験を積み上げて、最後迄「自分が大好きで信じられる自信と勇気と自立心」を持つことが出来る言葉かけと行動です。

この枠組みを提示されている大河原美以先生の考え方を参考にして幼稚園児を振り返って、考えてみたいと思います。

私達が子育てをしているときに、良い子に育ててほしいと願うのは親なら誰しもです。みんなわが子には良い子に育ててほしい、幸せになってほしいと願わない親はいません。

最近は幼児虐待など、この規範すら危ぶまれてきていることは残念なことです・・・私はどの親も自分の心や内面の問題が処理できずに、またはなぜそうしてしまうのか、自の心の問題に気づいていないで、起こしてしまった悲しい事件で、どの親の心にも、わが子が幸せになってほしいという気持ちはあると信じていたいですね。



ただ、その表し方、行動が間違っている。けれど、そのひと親の存在自体は否定したくない、きっとわが子を愛していたと感じてくれる日が来るに違いないと願っています。

すべての親はどんな事があっても、心の奥底では、子どもを愛していると私は感じるのです。

そして、その上で、愛するがゆえにわが子の幸せを祈る、幸せを祈るゆえに、子どもに無理をさせていないか、負担をかけすぎていないかに気を配る必要があります。

だからこそ、**私たちの行動、表し方(他人軸ではなく自分軸で感じたことのみを伝える)が大切**になってくると思うのです。愛しているからこそ、その思いが過ぎてしまうことがある。では私たちの子育てはどうすればいいのでしょうか。

こんなに親が愛していても、子どもは、「なぜ、愛されていない」と感じるようになるのか。

こんなに親が思っているのに、「なぜ、親がうざい」と嫌がられることがあるのか。

こんなに子どもの幸せを願っているのに「お前のせいで、こんな風に育ってしまった」と親を恨むようになるのか、そのことを、視点を変えて考えてみるのが大切になってきます。

青年期の子ども達の姿を振りかえることで、今、まだ幼い子どもの子育てに大切なこと、転ばぬ先の杖になるようなこと、教えてくれるものがたくさんあるように思います。

感じたこと
のみ伝える
大切さ⇒正直

相手は鏡



幼稚園の間も心配なことはたくさんあるかもしれませんが、深い問題は、やはり、青年期に顕著に現れてくるのです。幼児期に親の目を意識したみせかけの良い子では、いつかどこかで、爆発してしまうことになりかねません。だからこそ、今、幼稚園児をもっていらっしゃる保護者の方に知っておいて頂きたいのです。子育ての大切さを、そして同時に親が必死になりすぎず、リラックスして子育てをすることの大切さを・・・。

15歳の中学卒業を迎えたところに、人生の節目、ひとつの曲がり角がやってくるといわれています。そのときに、「ありがとう」の感謝の言葉とともに花束が届くのか、自分の子育てを後悔することになるのか、結果は後でしか分からないのです。だからこそ、これから一緒に考えて行きましょう。10年後、20年後を見通して、今できることを、できる範囲でいいので、やっておきましょう。心に留めておきましょう。

さて最初の枠組みに戻ります。

1、「他者からみて良い子」に育ってほしい

このように感じている親はつい、「過干渉」「過期待」（子どもが望んでいないのに、過剰に世話をし、心配し、期待をかけること）の子育てをしてしまいがちです。

他者から見て良い子に育ってほしいと願って子育てをする時、つい、子どもに過剰にしつけを厳しくしてしまいがちです。しかも、そのとき親がこう思うからというしつけ方ではなく、「人から笑われないように」とか「人がどう思うの?」と押し付けの教育をしてしまうことになりかねません

2、「親である自分にとって良い子」に育ってほしい。

次に「親である自分にとって良い子」を望むとき親は、子どもの嫌がる姿を見たくなくてしかれなくなります。先月号の5つの過ぎたるかわりと言うところの「過許可」「過放任」の子育てです。時に「過保護」も入ります。

電車の中で、暴れていたりするときに「運転士さんにしかられるからやめなさい」とか「そんなことしていたらおばあちゃんにしかられるよ」と親の責任ではなく他者の権威を借りて、しかったりもしてしまいます。

そうやって、人の目を気にして、エネルギーを溜め込んでいい子を演じいい子でありすぎると、思春期になって、心の問題が生じてくることは最近ではよく知られるようになってきました。

3、「真に子ども自身にとって良い子であってほしい」はある意味当然のことですね。これが私たちが目指す子育てです。このことについては最後の項で述べましょう。子育ての基本、そして、ゆりの樹幼稚園が目指す教育ですから。でもこれが子育てにおいて、理解できていそうで理解されていないのです。なぜでしょう。それは子育てにおいて上記の二つの枠組みを持ってしまう場合があるからです。

残念ながら「真に子ども自身にとって良い子であってほしい」と「他者からみて良い子に育ってほしい」「親である自分にとって良い子に育ってほしい」は同列ではなく、相反するものだからです。

さて紙面がなくなってきましたので、この続きと「よい子のふりと演技の違い」「人間の発達レベル」その先の話は冬号に譲ることにしましょう。